

学部・研究科 Faculty/School	学科・コース Course
海事科学部	グローバル輸送科学科 航海マネジメントコース

(1) 見たこと/What you saw; (2) 考えたこと/What you thought; (3) 感じたこと/What you felt;  
 (4) ジェンダーに敏感な災害対策はどのようなものだと思いますか

(1) 私がこのプログラムで見たことは、日本や日本以外の災害の実態とインドネシアの文化や生活です。私は災害についての知識が少なかったため、まず講義を通して、災害の定義やどのような災害でどのような被害が発生するのかなどを学びました。洪水によって発生する土壌流出などの話は面白く、また、台湾の学生の発表から、台湾における身近な災害被害や対策を見ました。実地研修では、津波の対策センターやメラピ火山の災害センター、災害で移住した村を見ました。そして、2週間のインドネシア生活を通してインドネシアの暮らしを見ることが出来ました。ジョグジャカルタは都市であったこともあり、交通量の多さや、街並みの混み合った感じには初めは驚きました。また、インドネシアはムスリムの人が多かったため、お祈りをする人やヒジャを被った女性など、宗教をきちんと守っている暮らしも見ることが出来ました。

(2) 私がこのプログラムを通じて考えたことは、いかにして英語で情報を得て、意思を伝えコミュニケーションを図ればよいかということと、災害などの非常事態の際にジェンダーと脆弱性をどう配慮したらよいかということです。プログラムの前半は講義中心で災害について学んだが、英語での講義は理解できない部分が多くあった。特に、講義内容が具体的な災害についてのものや資料のあるものは理解しやすかったが、聞いたことのない活動の講義は理解できなかった。そこで、講義内容について日本語で予習することがこの短期プログラムでは良い理解につながると考えたが、日本語では情報を発見しにくく、講義では知らない情報が依然として多くありました。そのため、外国で学問をしっかりと成し遂げたいときは、なんにせよ英語を使うことが必要不可欠だと考えました。しかし、今回のプログラムではグループワークやディスカッションなど、対話的なコミュニケーションが多くあったため、わからない部分の解消はやりやすかったと思います。また、私自身が英語で意見を言う際、細かい部分を伝えるのはとても難しかった。この時、なるべく自分で話すことが望ましいと思うが、スマートフォンを利用や、英語の上手な人に助けてもらうことも、コミュニケーション全体としてみればよい結果になるのではと思いました。次にジェンダー等の配慮については、現在日本やインドネシアともに十分ではないと感じました。災害の避難所では、特に女性に困難なことが多く、これを改善するだけでも難しい上、ジェンダーは男や女と外見で一目で分かるものだけではないため、この問題は非常に複雑だと感じました。解決策としては、災害の対策会に様々なジェンダーの人に参加してもらい意見をもらうというものに納得しました。なぜならば、このプログラムにおいてグループワークで避難所の管理や避難計画を話し合った時、私が当然だと思っていたことがインドネシアでは普通ではなく伝わらないことがあり、様々な背景を持った人が共に話し合うことは有意義だろうと考えたためです。

(3) 私が感じたことは、インドネシアと日本の災害対策では災害発生直後の対応は似ているが、その後の生活再建の道のりは違っているということです。メラピ火山周辺の見学や、沿岸の災害対策施設を見学し、インドネシアでの災害対策のシステムがどのようなものであるかを知りました。災害が起きるとまず、一時避難所に集まりそこから更に避難することや、食料の備蓄、軍隊の支援があること、避難所の作りなど日本と類似していることが多いと感じました。しかし、実際に火山により非難された方へのインタビューや、学生とのディスカッションの中で日本との違いを感じました。具体的には、インドネシアで災害による精神的な傷を癒す重要な方法が宗教に頼るということなどです。これに初めは驚きましたが、多くの人が共通の価値観を共有しやすい宗教は災害対策に非常に有効で、避難生活で宗教を考慮することは不可欠だとも考えるようになりました。日本でも被災地の統率などに宗教があると便利だろうと思いました。また、インドネシアでは、災害によって

もともと住んでいた場所から移り住むことに抵抗は少なく、移り住むことによって新しい人に出会うことが出来、以前より近隣の人と密接になることが出来て良かったと伺いました。これは、災害後の孤立が問題となる日本とは違ったもので、何がこの差を生んだのかさらに調べたいと思いました。そして、インドネシアの生活は刺激的で快適だと感じました。訪れた時は乾季で雨もなく、道路の環境を除けば過ごしやすく、イスラム教の規則が様々あるようだが、基本的にスパイシーな料理は美味しかった。また、見るもの全てが新鮮であり、ハイテクさを感じさせないが、実際はタクシーの手配など日本より便利なものも多くあり面白い生活でした。

(4) 今回のプログラムを通して、ジェンダーや脆弱性について学び、同時にインドネシアなどの災害についての話を聞いたが、ジェンダーや脆弱性が常に決まった物ではないと知ったため、災害発生時にあるジェンダーにはこの対策を取れば良いというものがないように思われました。また、AにはBの対策をのようなマニュアル的な対策を取るだけでは、ジェンダーに配慮して被災者の気持ちや要求に応えることが出来ないとも思います。そこで、事前に全てのジェンダーに配慮を十分に考えた施設を作ることなどは重要だと思いますが、災害発生後にいかに被災者の意見を聞きそれを素早く反映できるシステム作りが大切だと考えます。具体的には、ネットやアンケート紙による要望調査が考えられます。しかし、これには得られた要望のどれを実際に行うかという問題があり、一般的な考えや多数決を取るとジェンダー間での不平等は解決されないため、適していないかもしれません。また、少人数のグループをいくつか作り意見交流会を行うということも考えられます。この方法であれば、周囲の同意を得ながら災害対策を行うことが出来ると考えられます。ここで、ジェンダーの公表が難しい場合や意見を言いづらい場合もあるだろうが、この対策としては、災害が起こる前から地域や社会全体でジェンダーを当然と感じる価値観の醸成が最も効果的な手段だと考えます。全体として、画期的な対策は考えつかなかったが、ジェンダーの問題は人間の柔軟性に委ね、人々を素早く結びつけジェンダーの問題解決にあたってもらえるように、災害時においても情報や物の流れを円滑に保つことの出来る設備やシステムを作ることが大切だと考えます。